

おはようございます。気持ちのいい天気が続いておりますが、夕方、犬の散歩のために海に参りますと、若い人たちがかなり目立つようになってきました。思い思いに青春を楽しんでいる様子を見ていて気持ちの良いものでもあります。ただ、若い人には若い人なりの悩みがあるようにも思います。そして、この悩みであります。年を重ねるに従ってなくなるかというところというものはありません。むしろその反対に、返って深まっていくのが人の悩みというものであり、まただから、イエス様も「思い煩うことなかれ」と仰っているわけです。

経験も浅く、比べるものの少ない若い時の悩みは自分以外の者と自分とをついつい比べがちなのですが、それゆえ、自分の周りにいるすべての人が自分より偉く思えてしかたない。つまり、隣の芝生が青く見えて仕方ないということがあります。ただ、もちろん、それがいいことではないのは自分でも分かっています。比べたところでどうにもならないからです。けれども、そのままでは自信はどんどん失われ、生きる気力すらなくなってしまふ。そこで、そうならないために考えることが自己を確立すること、自分自身が変ることです。そして、年を経て思うことは、ある部分については変わったとも言えるのですが、自己の確立という点においてはどうか。私個人のことを申し上げれば、確かに人と比べることは少なくなったように思いますが、けれども、揺るがないどころか、揺るがされてばかりの毎日であるように思うのです。ですから、自己の確立など到底及ばない、そのため、自分を変えよう、変えたいなどとは、若い頃のように考えなくなって参りましたが、ただし、それはあくまで私の場合であって、そのための努力を惜しまず続けておられる方は多くおられることでしょう。そして、そこでその背中を押すのが聖書の御言葉であり、イエス様のお言葉です。ただ、一言申し添えれば、私自身、変わることを諦めたわけではありません。聖書の御言葉も、イエス様の言葉も、そこに

は私たちを変える力が間違いなくあると信じているからです。けれども、それは、自分はこうなりたい、こうしたい、こうあらねば、ということではないように思うのです。

年を重ねるといふことは、時間の経過の中で、できないことができるようになったり、できたことができなくなったりするものです。そして、私たちにとってそれは、神様の恵みによってということでもあります。ですから、そういう意味では、いいように変えられていくのが私たち信仰者でもあるのでしょうか。またそれが、私たちがこうして教会に集められ、この教会においてその生涯を過ごすことの醍醐味でもあります。従って、それが私たちであるわけですから、「変えよう」と無理に思う必要はありません。そして、私がそのような思いに至ったのは、聖書の御言葉と教会にどっぷりとつかりきったから、つまり、その醍醐味を味わい知ったからでもあります。ただし、今、「そういう思いに至った」と申しましたように、端からそう思っていたわけではありません。「変わらなければ」との思いについて最近まで囚われていたのは確かなことだからです。しかし、この日のイエス様のお言葉が教えてくれているように、だからそのような思いに捕らわれていたことが間違いであったということではありません。

私たちが、変わらなければ、変えられなければと思う理由の一つは、御言葉に「群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」とあるように、私たちがイエス様に悲痛な思いで見つめられている現状に生きているからです。そして、この悲惨な状況を見過ごしにしたままでいることがイエス様の御心ではないわけですから、私たちもずっとこの状態のままでは、そこでイエス様が仰ったことは何か。それが「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるよう、収穫の主になりなさい」というこの一言ことでありました。ところ

で、このイエス様のお言葉は、かつて東京神学大学の募集要項に記されていた御言葉でもあります。つまり、献身の勧めとして、神学校がこのイエス様のお言葉を用いたということです。ですから、私が献身へと導かれたのはこの御言葉に押し出されてのことでもあります。しかし、今から思えば、そこには、若さゆえの思い違いや行き過ぎ、焦りなどがあったようにも思います。それゆえ、この「収穫は多いが、働き手が少ない」との御言葉は、私にとってはほろ苦いものでもあります。それは、献身からしばらくの間、余白を埋めることばかりを考えていたからです。ただ、若いということは、経験が浅い上に思慮にも欠けているわけですから、それも仕方がないことだとは思っています。まただから、がむしゃらにやってみるしかないわけです。

さて、私の個人的なことは他の機会に譲るとして、イエス様のお言葉に戻りたいと思いますが、ところで、イエス様が「だから、収穫のために働き手を送ってくださいるように、収穫の主は願いなさい」と仰っているこのことを、皆さんはどのように受け止められたのでしょうか。「収穫は多いが、働き手が少ない」とイエス様は仰り、その上で、「だから」と仰っている。つまり、この「だから」をどう考えるかということでもあります。普通であれば、この不足、余白を誰がどう埋めるのかということがその次に来るように思うのです。つまり、誰がその働きを担うのか、それは、私か、それとも他の誰かか、ということです。しかも、このイエス様のお言葉を献身の勧めとして用いられれば、なおのことそう思いたくもなるものです。ところが、イエス様はそうは仰らない、「働き手を送ってくださいるように、収穫の主は願いなさい」とこう仰るのです。このことはつまり、献身の勧めとしてこのイエス様のお言葉を用いることは、その意図するところは分かるのですが、その本来の意味からすれば間違っていたということにはならないのでしょうか。ただ、結論から申し上げるなら、それは間違いではありません。なぜなら、献身ということは、自らの決意、意思に基づくものではなく、そのように導かれてこそそのものであるからです。つまり、主の憐れみによってこうして集められている私たち、主の教会に連なる一人一人の祈りが神様に聞き届

けられてこそだということなのです。ですから、献身の勧めとして、神学校がこのイエス様のお言葉を選んだことは正しいことです。それは、献身はそれをするかしないかという個人的な決意、意思の問題ではなく、群れとしての祈りの課題であるからです。しかし、そこでイエス様が「だから」と仰っていることは、献身という一つのことだけを指し示しているわけではありません。特別な志を持った、特別な人だけに語られたものではなく、それが群れとしての祈りの課題であるということつまり、私たちすべてに語りかけられているものだからです。

私はそのことを実際に祈りの交わりの中に置かれ知らされたのですが、ところで、イエス様が仰る「願う」と仰ることはどういうことなのでしょう。それは嘆願する、祈るということ、その根底にあるものは「欠乏」です。何も持っていない、だから、皆が必要としているということです。いろいろあるけれども、個人的にはもっとたくさんあったらいいなあ、ということではありません。私たちの手の中には何もない、だから、祈り求めなければならない、背景にあるのはこの群れとしての切実さです。そして、イエス様が次になさったことが十二人の弟子たちを呼び寄せ、権能をお授けになることでした。それは、「汚れた霊を追い出し、あらゆる病気や患いを癒やす」ためでもあります。ですから、そこには、弟子たち始め、大勢の人々の祈りがあり、その祈りがイエス様に届けられたということです。従って、私たちは、この祈りの力を侮ることはできません。ただ、まただからそこで考えたいのです。私たちが祈りの力を信じ、その力を侮らないということは、具体的にはどういうことなのでしょう。それは、もちろん、祈りは必ず聞かれると、そう信じていることでもあります。しかし、それを私たちが個人的に経験できる範囲のこととして考えるなら、それは、終わりのないことでもあるのです。なぜなら、多くの収穫が約束されているのは、イエス様が再臨されるその時のことでもあるからです。つまり、収穫の時期は、私たちの手を離れた終末においてのことだということです。ですから、この事実は私たちをある思いに導きます。祈りの力を侮らず、その力を信じ続けること、この続けるということは私たちに本当にできるこ

となのかと。

ここに記されている弟子たちの名前から分かることは、弟子たちが多種多様な、考え方も性格もまったく正反対な人たちであるということです。そして、イエス様はその一人一人に権能が授けられたわけですが、ですから、ここにイエス様の確固たる意志を感じないわけには参りません。けれども、イエス様のこの決意については、私たちの側から見るならどう見えるのでしょうか。多様性と言ってしまえば聞こえはいいのですが、ある意味で統一感を欠いたこの選択は、どこかちぐはぐな印象を与えます。それゆえ、イエス様が何も考えていないようにも見えるのです。一つには、徴税人のマタイと熱心党のシモンです。この二人は、普通に考えれば水と油の関係です。方や俗人、方や原理主義者、しかも、私たちがそうであるように、それぞれに染みつけたものはおいそれと抜けきるものではありません。つまり、それまでの過去を引きずっているのが十二人の弟子たちであり、その上で特別な使命を負って集められたとなれば、どういうことになるのでしょうか。ただ、彼らは思い思いに集まったわけではありません。一緒にいるのは「主にあって」ということなのです。まただから、十二という数字が彼らに当てはめられてもいるのですが、しかし、私たちにとっての洗礼がそうであるように、この十二という数字によって、彼らが過去と完全に切り離されたわけではありません。それゆえ、「主にあって」ということを除くなら、そこにはどうしてもちぐはぐな印象しか残らないのです。

また、気になるところはそれだけではありません。弟子の中にはイスカリオテのユダもおりました。しかも、このユダについては、御言葉が「それにイエスを裏切った」と念押しをしているように、永遠にその名をこの世に刻んだ人物です。そして、このユダの裏切りについては、お金に目が眩んだからだとも言われておりますが、12という数字が完全数であることを考えれば、金の亡者のような俗人は徴税人マタイ一人で十分であったはずですが、ですから、結果的にユダはお金を受け取り、イエス様を裏切ることになったわけですが、しかし、それがイエス様を裏切る理由であったのか、むしろ、このユダをして卑しい行動へと走ら

せた激しさ、ユダの裏切りを考える際には、ここに目を留める必要があると思うのです。そして、その理由とは、卑しさの対極にあるものです。つまり、イエス様に誰よりも心酔していたのがユダであったということです。けれども、弟子であればこそ、イエス様と共に歩む中でそのユダの心にあるものが芽生えていった。それがイエス様への不信感です。つまり、イエス様に裏切られたとの思いがユダの中で深まり、その激しさゆえにイエス様を裏切ることとなった、つまり、ユダの真面目さと熱心さがユダをして裏切る行為へと走らせた、ユダの裏切りについては、そのように考えることもできるのです。

そして、さらに目を引くのは、イエス様が弟子たちに与えた権能です。イエス様が村々を巡ってその力を発揮したとあるように、悪霊を追い出し、あらゆる病気や患いを癒やす力は、イエス様と同等の力が弟子たちに与えられたということです。では、弟子たちはその力を自分たちのために用いることはできなかったのでしょうか。ユダがもしお金に目が眩んだとしたら、悪魔のささやきに耳を傾けたということです。ですから、誰でもいいので、その力をもってして悪魔を追い出すこともできたはずですが、また、熱心さと真面目さについても同じことが言えます。それが病的なものであれば、弟子たちの誰かが癒やしを与えればいいことですし、また、熱心さと真面目さは、ある意味で頑なさにも通じるところがありますので、悪魔に乗じられる可能性も高く、もうしそうであるなら、与えられた権能を用いさえすればすべてがよかったです。しかし、結果はそうはならなかった。では、そうはならなかったのは、弟子たちが怠慢だったからなのか。それとも、そもそものところで、イエス様が与えた権能がまったく役に立たないものであったからか。いずれにせよ、イエス様が選ばれた収穫のための働き手によって、問題が余計にこじれていったのは間違いありません。しかも、その彼らを選んだのは他でもないイエス様でありました。

ところで、ここで見え隠れしているものは、私たちがイエス様になんとかして欲しいと願うことばかりです。ただ、残念なことに、この期待に込めてもらった者は、私たちの中にも一人もおりませ

ん。では、ここに記されていることは、やはり信じ続けることの難しさ、祈り続けることの難しさを明らかにしているのでしょうか。つまり、私たちはイエス様の憐れみの外に置かれているのか、ということです。では、どうすれば、私たちはイエス様の憐れみの内側に置かれるようになれるのか、そこで私たちが考えることは、イエス様の憐れみの内側に置かれるように自分自身が変わることです。けれども、権能が与えられ、大きな変化がもたらされたにも関わらず、弟子たちはそれでも変わることができなかつたのです。しかも、この変化については私たちの切実な問題とも深く関わっています。それは、イエス様が「願いなさい」と仰るように、欠乏し、何も持っていないに等しいのが私たちでもあるからです。

憐れみを受けるということは私たちが好ましい状況には生きていないということです。それゆえ、改善の必要がある。まただから、確固たる意思をもって、変わらなければならない、そう考え、御言葉と真剣に向き合っている方は少なくないようにも思います。しかし、イエス様の弟子たちがそうであるように、御言葉が伝えてくれていることは、それとは真逆のことでもありました。私たちは、変わろうとして変わることができない、主の十字架の出来事はこの点を私たちに明らかにするからです。けれども、主の十字架は、私たちの罪ある現実を断ち切り、まったく異なる次元へと導くために示されたものではありません。なぜなら、もしそれがイエス様と神様の願いであるなら、それは、犬に猫になれと言うに等しいことでもあるからです。それゆえ、救われる者は一人もいない。そこで、最後にもう一度今日の最初の御言葉に聞きたいのですが、そこに記されているイエス様の憐れみ、その御心とはどういうものなのでしょう。

人々を教え、福音を宣べ伝え、説教し、癒やしと慰めを与えたのがイエス様であります。その上で人々に与えられたものがその憐れみでありました。つまり、外側に立っていたイエス様が人々に近づき、人々と関わり、一人一人の実情を深く知った、そして、この流れの中で心を深く揺さぶられたのがイエス様であったということです。このことはつまり、時間と出来事を人々と分かち合う中

で互いに大きな変化が生じたということなのです。外側から眺め、気の毒にと思ったのではなく、その実情を深く知り、もみくちやにされながらも同じところに立とうとした、憐れみとは、ある意味でイエス様の激しい心の動きを示しているのです。そして、このことはまた、同じところに立てばこそ変えられていく変化、このプロセスを示しているということです。それゆえ、イエス様の憐れみを考える上で大事な点は、イエス様の理解力、受容力の高さではありません。イエス様が人々のために、弟子たちのために、そして、私たちのために時間をかけ、私たちと同じようにジタバタと足掻いているということ、大事な点はこの事実です。それゆえ、私たちの望むような変化がすぐにもたらされなくても、私たちは嘆く必要はありません。なぜなら、その私たちと共に歩んでくださっているのがイエス様であるわけですから、やがて弟子たちが大きく変えられていったように、私たちもまたイエス様と共にあるこの交わりに置かれている以上、御心に適った形で必ず変えられていくことになるからです。それは、私たちが置かれたところにはイエス様が必ず共にいてくださっているからで、しかも、そのイエス様はいつまでもどこまでも一緒に、それも、もみくちやになることをも厭わず、私たちと共に歩み続けてくださっているのです。

弟子たちに与えられた権能とは、私たちを新しい全く別の何かに変わるための力ではありません。イエス様と共にある教会という交わりの中で現に私たちに働いている力であり、まただから、弟子たちも教会という交わりの中で御心に適った形で変えられていくことになったのです。つまり、そのような力に囲まれ生きているのが私たちであり、それゆえ、イエス様といつまでも共に歩み続ける私たちは、御心に適うように、イエス様によって必ずいいように変えられていくのです。なぜなら、手のかかる私たちともみくちやにされながらもどこまでもいつまでも共に歩んでくださっているのが私たちのイエス様であるからです。祈りましょう。